



新潟県の佐渡島は日本海に浮かぶ大きな島です。7月下旬、複数の新聞社のこども記者が佐渡取材する「新潟空港 あつまれ! キッズ学び旅応援大作戦!」(新潟県主催)が行われ、道新こども新聞まなぶんから太田優人さん(札幌市・新陽小5年)が参加。佐渡島の歴史と魅力を調べました。(中出幸恵)

こども記者見ぶん録

番外編

「佐渡島の金山」江戸幕府支える



北見さん(右はし)から佐渡で作られた小判の説明を聞く太田さん(左から2人目)ら、こども記者たち=きらりうむ佐渡(いずれも新潟日報社・伊藤駿平さつえい)

手作業の技高め 質の良い金生産

佐渡島は一周約280キロ、面積は東京23区の約1.4倍です。自然が豊かで農業や酪農が盛ん。2004年に10市町村が合併して佐渡市となり、約4万7千人が暮らしています。

24年には「佐渡島の金山」が世界文化遺産に登録されました。太田さんは金山の歴史を学ぶため、新潟日報社(新潟県)、中日新聞社(愛知県)、神戸新聞社(兵庫県)のこども記者の計5人で、

情報発信施設「きらりうむ佐渡」(佐渡市相川)を訪れました。「大きな小判だなあ」。太田さんが目をみはります。「江戸時代中期の、享保小判の模型で、実物の26倍です」と佐渡市の世界遺産係の北見重樹さん28が説明します。「小判には佐渡島で作ったという印があります。分かるかな」と北見さん。太田さんは裏を見て「佐」の文字があったと答えました。

佐渡島では江戸時代初期から本格的に金をほり始めました。他の金山とのちがいは、手作業でほったり加工したりする技術を高め、質の良い金を生産したこと。1989年までの約400年間で78トンとれました。島には小判の工場もあり、佐渡島の金は江戸幕府の財政を支えました。

金山ではさまざまな道具が使われました。太田さんが注目したのは、金をほる時に出た水を運ぶ「水上輪」です。木製のつの中、らせん状の板が付き、つを水に入れてから持ち手を回すと水がくみ上がります。

金をほったあとを見学できる観光施設「史跡佐渡金山」に、水上輪を使った展示があります。太田さんは「機械がない時代に効率よく作業していたのはすごい」とじっくり観察しました。

このほか、岩が多い海でも小回りがきくよう、洗濯用たらいを改良した「たらい舟」の体験や、金山で出る土を使った陶芸にも挑戦。太田さんは「北海道では体験できないことばかり。見られなかった場所もあるので、また佐渡島に行きたい」と笑顔で話しました。

北海道から新潟県へ行くには飛行機が便利。新潟空港(新潟市)へは札幌丘珠空港(札幌市)からトキエアが、新千歳空港(千歳市)からフラジドリームエアラインズ(日本航空との共同運航便)と全日空が、いずれも毎日運航しています。

佐渡島の両津港へは、佐渡汽船の新潟港からフェリーだと約2時間半で、船体を海面の上に浮かせて走るジェットfoilだと約1時間で、それぞれ到着します。



佐渡島の金山でとれる赤い土を使った「無名異焼」体験では、コップを作りました。

木製の「かい」で、たらい舟をくみ太田さん(手前左)



走るSL けむりや車体かっこよく 新潟の鉄道見学

取材に参加した太田優人さんは鉄道が大好きです。自由時間に新潟市内の駅や鉄道の施設を訪れた感想を書いてもらいました。

新潟市のJR新津駅で観光列車「SLばんえつ物語」を見ました。蒸気機関車(SL)が客車を引っ張り、新津駅と福島県の会津若松駅の間を走ります。SLが線路

を走る姿を見たのは初めてで、勢いよく出るけむりや車体の部品一つ一つがかっこ良かったです。

新津駅から少しはなれた所に新潟市新津鉄道資料館がありました。「鉄道のまち」として栄えた新潟の歴史を学べる施設で、200系新幹線など引退した車両を見学しました。

鉄道の運転士気分を味わえるシミュレーターも体験しました。アクセルやブレーキを操作して、制限時間内に目的地到着を目指します。コースは新潟県内の路線で、目の前のスクリーンに映る景色を見ていると、本当に運転している感覚になりました。

新潟で歴史や文化を学んだほかに、自分が好きな鉄道を見ることが



ができました。また新潟に行く時には、ローカル線を見たり新幹線に乗ったりしたいです。

JR新津駅で発車時間を待つSLばんえつ物語(太田さんさつえい)